優秀賞

優しさがあふれる手紙

茨城県　総和中学校　二年
高橋　星璃奈

私が卓球の大事な試合をひかえた前日の夜のできごとです。試合は山梨県だったので、有名なほうとうのお店に行って、チームメイトとどれにするかたくさん悩んで、注文して、喋りながら楽しく待っているとき、隣に仲の良さそうな老夫婦が手を繋いでやって来ました。

席に着くと、旦那(だんな)さんがメニュー表を広げ、二人で見ていました。でも、何も話さずに、アイコンタクトや、指で写真をさすだけでメニューを決めていました。そこで私は、なぜ何も話さないのかなと少し不思議に思って見ていると、旦那さんが、

「すみません。」と声をかけ注文しました。

ご飯を待っている間、2 人はやっぱり何も話しませんでした。でも、口は動いていなくても手が動いていて、2 人の表情は笑っていたりして楽しそうでした。それを見て、私は気づきました。2 人は手話で会話しているのだな、と。

すると、私たちが頼んだものが届き、同時に「お冷やいかがですか。」と店員さんが水を持ってきてくれました。隣の夫婦にも「いかがですか。」と聞くと、旦那さんはすぐに答えたのですが、奥さんは答えませんでした。旦那さんが、

「すみません、耳が聞こえないのです。」

と伝えると店員さんは、

「そうなんですね。失礼しました。」

と笑顔で言い、戻っていきました。

そして、夫婦のところにご飯を運んできたときに、店員さんが「ごゆっくりどうぞ。」と奥さんに紙を渡しました。

少し気になってのぞいてみると、

『本日はご来店ありがとうございます。ごゆっくりとお楽しみください』

と丁寧に書かれていて、奥さんは最初驚いていましたが、とても喜んでいました。旦那さんも嬉しそうで、私は見ていただけなのに思わず笑みがこぼれました。熱々のほうとうを食べながら、私は体も心も温まり、幸せな気持ちになれました。

ふと、私が奥さんの立場だったらということを考えてみました。なんの音もなくて、何も話すことができないというのは、自分にとっても周りの人にとっても大変で、とても辛いことだと思いました。だからこそ、店員さんのやさしさと気配り、思いやりであふれたあの小さな手紙は、夫婦 2 人にとってとても嬉しくて、心を救ってくれるようなものだったのではないか、と思いました。

1 人の行動が誰かを救い、周りの人たちのことも、とても良い気持ちにすることができるということを、知ることができました。

今度は私が、身の回りの人をそんな気持ちにさせられるように、やさしさと思いやりを大切にし、すぐに行動できるように、勇気を持って笑顔で生活していきたいです。